

タイトル：憂鬱な日曜日（仮）

【主な登場人物】

千穂子…主人公

ユリ…同じトラウマを抱える少女

片桐…死にたい少年

クラゲ…ユリのストーカー

【長めのあらすじ】

（回想シーン）

主人公の私——**小笠原千穂子**——は、食品加工会社を営む両親と三人暮らしの小学六年生。食卓にはいつも、かまぼこやさつまあげといった練り物が並ぶ。

幼いころから両親は忙しく、兄弟もいない千穂子は一人で遊ぶことが多かった。学校の図書室や私立図書館で本を読み、空想の世界に浸る毎日。「普通ってつままないね」が口癖のどこにでもいる平凡な女の子は、特別な自分になりたくて初めての家出を試みる。

最初は心配してくれた両親だったが、次第に呆れられてしまう。図書館のインターネットを利用し、家出少女が集う掲示板を見つける。そこで知り得た情報を元に、とある場所へ向かった。

そこは、コンビニが一階にあるマンションの二階で、テレビ、ゲーム、漫画、ジュース、お菓子などが無料で提供されている。そこで、千穂子は**ユリ**という同い年の少女に出会う。少女たちは、そこを「サロン」と呼んでいた。

ユリは、習い事が多く、自由な時間が持てないことに不満を持ち、塾をさぼってサロンへ通っていた。

サロンは、児童センターへ行くようなノリで、ネットカフェと同等のサービスが無料で得られることが少女たちにウケていた。広いリビングには、いくつかの固定電話があり、たまにかかってくる。常連らしき年上の女の子が、電話を受け、「その髪の毛の短いピンクの服の子電話に出てー」と言っているが、どういうシステムなのか最初はわからない。ユリは何度か指名されていたが、すぐに電話を切ってしまう。

千穂子は、ユリに訊ねる。

千「あの電話は何？」

ユ「ここ、マジックミラーで見られてるんだよ。窓の外には、男の人がいる。私たちは商品。気に入った子を指名するっていうシステム」

千「指名されたら、どうするの？」

ユ「断るのも自由だし、ついて行くのも自由だよ」

毎日通ってはいたものの、九時頃には家に帰っていた二人。

そんな中、**神**に指名されたらもっと素敵な場所に行けるらしいという噂を聞く。その根拠として、指名されてサロンを出ていった子たちは誰一人ここへは戻ってきていないから。きっと、「すごいところなんだ」と誰かが言います。

好奇心がおさえられなくなった千穂子は、指名されないかずっと待っていた。だけど、指名されるのは顔の綺麗な子ばかり。そんな千穂子の気持ちを察して、ユリが「二人一緒なら行ってもいいよ」と、電話の相手に交渉する。

そして、ついて行った先は地獄の館だった。郊外にある廃墟。そこには、選りすぐりの美少女たちが奴隷のように扱われていた。薄暗い部屋に変な音楽（聴いたら自殺してしまうという都市伝説がある曲：憂鬱な日曜日）がかかっている、毎日遺書を書かされる。千穂子とユリは、そこで行われる悲惨な出来事に怯えながら過ごした。一人、また一人といなくなる。きっと、殺されたんだろうと思っていると、また別の少女がやってくる。

神は、三十代くらいの細面の男で、決してモテなさそうという感じではないが、どこか挙動不審。眉間に人差し指をとんとんと当て、自分に酔いしれているような話し方をする。言うことをきかないと殴る蹴るの暴行。

ある日、一人の少女が男の隙をついて逃走した。見張り役だった子供（後に再会する**片桐**）は、罰として男に折檻される。そして、警察がやっと動き出す。ニュースで報道。無二無三で逃げた少女は、男の名前はおろか、監禁場所もよく覚えてなかったが、徐々に捜査の手は男に迫ってきていた。男は、身の危険を感じて逃走しようとする。その隙をついて、千穂子とユリも逃げ出した。

数日後、警察に逮捕される寸前、男が首を吊って死んだというニュースを聞き、千穂子は安堵する。男の体からは、睡眠薬や覚せい剤などが発見された。殺された少女たちの遺体が廃墟の下から見つかったという報道もあった。

男は、祖母の家のハナレで生活をしていた。祖母は、男の犯行を知っていたが怖くて何も言えなかったと証言している。犯人隠避罪で逮捕されたが、公判の途中で病死した。

(小説の書き出しはここから始まる)

事件から数年後。あの事件以来、元のつまらない日常に戻ってしまった千穂子。ある日、清蘭女子校の中等部の制服を着ているユリを見つけた。よし、自分も同じ高校に行こうと決め猛勉強。

私立のミッションスクール、清蘭女子高校に今年の春、特待生として入学。現在、15歳。

南条ユリは、家が金持ち。きれいな顔立ちのため、昔から男の子によくモテた。毎朝、同じ電車に乗っている他校のクラゲからストーカーの被害に遭っている。女の子でいることを鬱陶しいと感じている。過去のトラウマも重なり、バツサリ髪を切り、男の子のような格好をするようになった。

すでに出来上がったコミュニティ、ヒエラルキーの頂点に君臨するユリは、今流行りのジェンダーレス女子と呼ばれる格好で、宝塚の男役のような振る舞いをし、同級生、下級生からも人気がある。

ユリは、千穂子のことには気づいていない様子。話しかけても、知らんぷりされる。本当にあのことを忘れてしまったの？ しつこくすればするほど、ユリの取り巻きに邪魔される。

ある日、駅構内でクラゲがユリを盗撮しているのを千穂子が見つけ、スマホを奪い、踏みつけて壊した。千穂子は「二度とユリに近づくな」と叫ぶ。クラゲくんは、スマホを壊されて激怒。周りがざわつきはじめたため、めんどろになるのを避け、ユリと千穂子は手を繋いでその場を逃げる。

なんだかんだあって、二人は仲良くなる。過去のトラウマも二人なら乗り越えられると。

千穂子は、推理小説を読むのが好き。その作家が現在スランプに陥っているという。ファンレターを書くうちに、返事をもらえるように。ネタ切れした作家は、『愛、金、プライド』以外の殺意とは何かで悩んでいるという。千穂子は、その作家の役に立ちたい、答を見つけて教えてあげたいと思う。

「なんか、つまんないね」が、千穂子とユリの口癖。

突然、「あそこ、まだあるかな？」とあって、サロンのあった場所へ向かう。そこで、片桐と名乗る男の子に出会う。通信制の学校に通っている一つ上の高校二年生。髪が長くて華奢で色白の美少年の片桐は、まだ声変わりしていない。

「時間がない」といつも言っていて自分の儚さと美しさのタイムリミットが近づいていることに怯えている。お小遣いをくれる年上の女の人たちのことを可哀想と言いながら、自分の価値はそこにしかないとも思っている。リバーフェニックスの名言「死体置き場の中の一番かっこいい死体でありたい」を心のモットーにしている、自分は「一番きれいな死体でありたい」という願望がある。そのことを千穂子とユリにも話す。千穂子とユリは、わたしたちに殺意が芽生えたらねと冗談を飛ばす。

三人で遊ぶことが増え、イタズラもエスカレートしていく。

千穂子は、なにげなく片桐に訊いてみる。「愛、金、プライド」以外の殺意ってなんだと思う？「知りたければ、本当に殺してみるしかないんじゃない？」と、笑みを浮かべる。

そんなとき、ユリが片桐に恋心を抱いたことにより、二人の関係が崩れだす。千穂子は、ユリを自分だけの特別な存在だと思っていたのに、男の子なんかに恋をしてバカみたいだと思う。

イライラした千穂子は、ストーカー・クラゲにユリを襲うように頼む。そして、レイプされそうになったところを千穂子が助ける。「ほらね、男の子って野蛮でしょ。片桐も男の子なんだよ、同じだよ」と。

そして、千穂子とユリは、片桐を「死体置き場で一番美しい死体」にするための計画を練り始める。片桐を傷つけず苦しませずに殺す方法を。

計画を終え、二人は思う。殺意なんてなかったよね、と。私たちは、ただ頼まれてやっただけだもん。全然、悪くないよね。人を殺してもなんとも思わない。

言いようのない空虚感を抱いた二人は、片桐の死体を見ながら、本当に殺すってこういうことじゃないよねと言い合う。「なんか、ちゃんと殺してみたくない？」という軽いノリで殺人を行う。ターゲットは、ストーカーのクラゲくん。別に誰でもいいよね、と笑いながら。二人は、クラゲくんを呼び出し滅多刺しにして殺す。

血まみれの二人は、微笑み合う。「第四の殺意、見つかったね」と。早く、あの作家に教えてあげなきゃ。

第四の殺意、それは単なる『〇〇』だった。神の気持ちが少しわかったような気がした二人。